

Anders Sjöberg: *Synonymous use of synthetical and analytical rection in Old Church Slavonic verbs.*

Almqvist & Wiksell. Uppsala. 1964.¹

これは *Acta universitatis stockholmiensis* のうちの *Études de Philologie Slave* というシリーズの第11巻として公刊された論文である。統合的支配 (synth. rec.) というのは、動詞が前置詞を伴わない名詞の斜格を直接支配する場合であり、分析的支配 (analyt. rec.) とは前置詞付の名詞を支配するものである。一般に支配は動詞毎に異なるものであるが、場合によっては同一の動詞が複数個の支配を許容することもある。この場合には支配の相違に応じて相異なる意義が対応する場合と、少なくとも知的意義に関しては同義である場合とが考えられる。本書で扱う synonymous use というのはこの後者の場合に外ならない。例えば、**ЦЕСАРЬСТВОУЖШТОУ ГРЪВЬСТЪН ВЛАСТН. МНХАНЛЪ ФЕОΔΩΡЪ** (Supr. 1. 65.2 c. dat.): βασιλεύοντος τῆς Ρωμαίων ἀρχῆς Μιχαήλ Θεοδώρος に対して **НЕ ХОШТЕМЪ СЕМОУ ДА ЦЕРСТВОУЮТЪ НАДЪ НАМН** (Mar. 284, 25): ὃ θέλομεν τοῦτον βασιλεῦσαι ἐφ' ἡμᾶς のようなものである。明らかなように「同義」の基準はギリシア語原典との対比に置かれている。

本論文の主旨は、このように支配の選択の可能性の存する時に、1) ギリシア語原典の構文がこの選択に影響を与えているのか、あるいはこの選択は古代スラヴ語の内的構造に依存しているのか、を知ること、並びに 2) この言語に内在する傾向が分析的支配に向っているのか、それとも統合的支配に向おうとしているのか、を明らかにすることにある。

第一部は使用した資料がギリシア語原典との対比と共に列挙され、原典との対比において共に統合的なもの (SS)、共に分析的なもの (AA)、古代スラヴ語では分析的であって原典では統合的なもの (AS) 及びその逆のもの (SA) に分類され、更に明確な逐語訳ではなく、対応を欠くものについては、それぞれ A-、S-、-A、-S のように示される。

第二部は先に述べた二点についての具体的な分析を取扱うが、この際 SS、AA のように両者が「対応」correspondency している場合はこれが原典の影響によるものであるか否かについて何等かの結論を導くことはむづかしい。従って分析の主たる対象は専ら SA、AS のような「非対応」divergency を示すものになる。

もしギリシア語の影響が無く、かつ両様の支配が完全に同義であるという条件の下では、文体的その他の外乱がなければ、A と S とは大略同数の分布を示すと予想される。またこの仮定の下ではギリシア語の S と A のそれぞれ半数が古代スラヴ語の S と A とに配分されると予想される。このような仮説 (正しくは帰無仮説) の下に実際に現われた分布が、

¹ 『ロシア語ロシア文学研究』 第6号 昭和49(1974)年11月 82-86頁。

この仮説を棄却するどのような有意水準を示すかを検定しようというのが、第二章の目的であると理解される。ここであえて理解されと言ったのは、この方法を採用するについて式の説明も、この計算が有する意味についての説明も本論文では一切省かれているからである。論証の基礎となる原理的なことがらを説明せずに計算だけを行うのは、単なる不親切というだけでは済されないものがあると思われる。我々如き統計学の門外漢にとってはただ結果を拝聴するより外はなくなるからである。この箇所を忠実に引用すれば次のようになる。

Formula:

		Greek	
		S	A
OCS	Divergency	$s_1 (= AS)$	$a_1 (= SA)$
	Correspondency	$s_2 (= SS)$	$a_2 (= AA)$
		s	a

The proportion of divergence is $P = \frac{s_1}{s}$ and $P = \frac{a_1}{a}$ respectively.

Hypothesis: $\hat{P}_S = 0.5$; $\hat{P}_A = 0.5$, where $\hat{P}_S$ and $\hat{P}_A$ denote the true proportion of divergencies in column S and A respectively.

Test: $\lambda = (1 - 2P_S)\sqrt{s}$; $\lambda = (1 - 2P_A)\sqrt{a}$, respectively.

If

$\lambda < 1.96$	— not significant	$5\% < P$
$1.96 \leq \lambda < 2.58$	* almost significant	$1\% < P \leq 5\%$
$2.58 \leq \lambda < 3.29$	** significant	$0.1\% < P \leq 1\%$
$3.29 \leq \lambda$	*** highly significant	$P \leq 0.1\%$

P = the probability of obtaining by chance at least so great a deviation from 0.5 as that noted.

この場合 λ というのは結局平均値の両側検定 (いわゆる t 検定) に当るものであり、従って $|\lambda| \geq 1.96$ であれば仮説 $\hat{P}_S = \hat{P}_A = 0.5$ を正しくないとする有意水準 (仮説を棄却する場合の危険率) が 5% 以上であることを意味している。従って P が小さくなればなる程仮説を正しくないとする有意水準は高くなることになる。

さて著者は動詞を分類して ① 格支配による分類、② 意味論的分析、③ 主だった写本による分類、④② と ③ の組合わせ、の四項目を立てる。

① については、例えば生格及び与格支配のものについては S 、 A 共に高水準の有意差を示し、ギリシア語の強い影響の存在を示すが、造格及び所格支配のものについては、 A

に関しては高い有意差を示すものの *S* に関しては前者は僅かに有意、後者は有意差なしとなっている。

② については例えば生格支配を行う場合、分離をあらわすもの (e.g. БѢГАТИ, НЗБДВНТИ etc.)、心理状態をあらわすもの (e.g. БОИТИ СѦ, КАИТИ СѦ etc.) については高い有意水準を示すが、方向、到達を示すもの (e.g. ДОИТИ, ДОВЕСТИ etc.) 及び飽満を示すもの (e.g. НАСЫШТАТИ СѦ, НСПЛЫНТИ СѦ etc.) については、*S* については著しい有意差が認められるものの、*A* については全く有意差が認められないという。

③ については Codex Marianus, Codex Suprasliensis, Psalterium Sinaiticum, Euchologium Sinaiticum を通じて生格、与格については高い有意水準を示すが、造格と所格については Psalterium Sinaiticum を除いて一般に有意水準が低いという特徴をもつことが明らかにされる。Psalterium Sinaiticum の場合には生格、与格に加えて造格、特に所格の有意水準が極めて高いことによって他と区別される。

第二部第三章さきに述べた第二の点、即ちこの言語に内在する傾向が分析的支配に傾いているのか否かを分析しようとする。この場合仮説となるのは、もし偶然的な要因による偏りが存在するならば、これは *AS* にも *SA* にも等しく現われるであろうということである。逆に必然的な要因によるものであるとしたならば、これは $\hat{P}_S = \hat{P}_A$ という仮説から計算される期待値との差がどちらの方向にどれほどの水準で有意であるかを検定できることになる。 χ^2 (カイ自乗) 検定 が用いられているのはこのためである。紙幅の都合で詳述はしないが、ここにおいても *t* 検定の場合と全く同様に説明が欠落しており、 χ^2 検定の自由度 (この場合は分類項目が二つなので $f = 1$) についての言及すらない。我々に与えられるのはただ Formula (これは *t* 検定の Formula に $n_1 (= s_1 + a_1)$, $n_2 (s_2 + a_2)$, $n (= n_1 + n_2)$ を追加したもの)、Hypothesis ($\hat{P}_S = \hat{P}_A$), Test ($\chi^2 = \frac{n(s_1 a_2 - s_2 a_1)^2}{s \cdot a \cdot n_1 \cdot n_2}$) と下の表に過ぎない。

$\chi^2 < 3.84$	— not significant	$5\% < P$
$3.84 \leq \chi^2 < 6.64$	* almost significant	$1\% < P \leq 5\%$
$6.64 \leq \chi^2 < 10.83$	** significant	$0.1\% < P \leq 1\%$
$10.83 \leq \chi^2$	*** highly significant	$P \leq 0.1\%$

ここであげられている χ^2 の値はさきにのべた $f = 1$ の場合の値に外ならない。

何れにもせよこの χ^2 検定によって計算された結果は、生、与、造、所のすべての格にわたって *AS* 方向へのきわめて高水準の有意差を示し、従って古代スラヴ語は分析的支配への強い傾向を有しているということになる。

一方 *t* 検定によれば、生格と与格に関してはギリシア語原典に従う傾向が強いが、造格と所格については *A* に関しては高い有意水準を示すものの、*S* に関しては有意差が認められないということであった。この二つの検定の結果から導かれる結論は次のようなもの

となろう。即ち全体として分析的支配へ向う強い傾向の中で、生格、与格はなおギリシア語原典に従おうとする傾向を未だ濃厚に保持しているのに対し、造格及び所格においては分析的支配への志向が、ギリシア語原典に従おうとする傾向を既に凌駕しているということである。しかし例えば Codex Marianus では与格と所格に一定の有意差が存在するが Codex Suprasliensis では与格、造格、所格にそれぞれ高水準の有意差があるなど、文献によるパラツキが極めて大きい。これが何に起因するものであるかについては、今後議論がなされねばなるまい。ただし Psalterium Sinaiticum は造格が高い有意水準を示す外は有意差が認められず、この点でも他の文献とは異って際立った保守的性格を有していることが知られる。

このように本書によって従来研究者の主観的な言語感覚に委ねられていた、ギリシア語原典の及ぼした影響の規模と程度、古代スラヴ語本来の使用との関係等が或程度統計的に明らかにされ、数々の興味ある結果が提示されたことは、この方面の研究に新たな手掛りを与えたことであり、この点著者の労を多としたい。

しかし聊か蛇足めくが同時に指摘しておかねばならないのは、統計的方法は飽くまで母集団の有する傾向をいわば macroscopic な視点から把握するためのものであって、そこには当然限界の存することである。従って細部に立入った議論はやはり主として文献学的研究によって補足、解釈されなければならない。本書で得られた成果も決してこのような本質的な制限を逃れ得るものではないと思わされるのである。